

B-57 ハンノキ属植物の球果におけるタンニン量の季節的变化とその染色効果
名古屋女子大 犬口キミヨ

目的 ハンノキ属植物は比較的身近に得られるタンニン含有植物であり、その球果は昔から重要な染料として用いられている。主に用いられたのはオオバヤシャブシと思われるが、それは含有するタンニンを鉄塩と反応させて黒染めをするものである。タンニンの含有量は、木の種類、生育地、採取時期によりかなり差があるものと考えられ、採取時期については秋が良いとする文献が多い。これについて、数種のハンノキの球果におけるタンニン量とその染色効果、そして採取時期の関係について検討を行なった。

方法 試料に供したのは、ヤマハンノキ、オオバヤシャブシ、ハンノキ、ヒメヤシャブシの4種である。毎月旧球果と新球果を採取し乾燥後粉碎して試料とした。タンニン量の定量はLöwenthalの過マンガン酸カリ滴定法によった。染色は東洋精機製の染色装置で硫酸第一鉄媒染によって行なった。染色効果は染色布の反射率によって検討した。

結果 種類別ではオオバヤシャブシ、ヤマハンノキにタンニン量の多いことが認められた。またタンニン量と反射率をなわら染色効果は概して反比例の関係を示し、タンニン量がそのまま染色効果につながる事が確かめられた。採取月別によるタンニン量の変化については、6、7、8月頃に最高値を示し、以後減少し、秋が深まるとからはあまり変化しない。よって球果の採取は初夏から真夏にかけての時期が最適であると思推される。